音楽の友

ONGAKU NO TOMO

9

Monthly September 2011 No.9
2011年9月1日(毎月1回1日)発行 第69巻9号
1936年2月22日 第3種郵便物認可

Contents

特集

61 **来日演奏家速報2012**

震災の影響をものともせず、来年も世界各国から数多くの演奏家の来日が予定されています。本特集では各方面への取材を元に、その最新情報をいちはやくお届け。2012年1月～12月の来日予定とともに、ジャンルごとに聴き逃せないアーティスト、団体をご紹介します。併せて、2013年以降の〝早耳情報〟にもご注目下さい。
(奥田佳道／東条碩夫／堀内 修／真嶋雄大／吉村 溪／渡辺和彦)

カラー

8 [来日直前インタヴュー] 9月に来日、バイエルン州立歌劇場 音楽監督ケント・ナガノ (小長久美)
12 20カ月ぶりに東京でタクトをとった小澤征爾 (渡辺 和)
14 [Interview] ボローニャ歌劇場と来日するディミトラ・テオドッシュウ (野田和哉)
18 音楽之友社創立70周年「〝指揮者〟チョン・ミョンフンのトーク&室内楽」(山田治生)
23 [レポート&特別対談] 兵庫県立芸術文化センター《こうもり》の立役者、佐渡裕、広渡勲は語る (白石知雄)
26 [Interview] コヴァルスキー、最後の《こうもり》を語る (吉村 溪)
27 [海外取材] 世界的大ブレイク! 2 Cellos (後藤菜穂子)
28 [海外取材] 10月にサンタ・チェチーリア管を率いて来日する アントニオ・パッパーノ (後藤菜穂子)
30 [海外取材] フィンランド発、クフモ室内楽フェスティヴァル (藤井可奈子)
32 [Interview] 甲斐栄次郎～ウィーン国立歌劇場より久々の凱旋帰国 (河野典子)
34 [Interview] 祝・デビュー20周年! 横山幸雄、リストを語る (伊熊よし子)
36 水戸芸術館復活! 水戸室内管弦楽団第82回定期演奏会 & チャリティ・コンサート in TOKYO (白石美雪)
38 [Interview] バッハからケージへ～〝鬼才〟フランチェスコ・トリスターノ (山田真一)
42 音楽の遺蹤㊹クレムスミュンスター修道院 (木之下 晃)

特別企画① 82 **来日直前、ボローニャ歌劇場! 日本公演の観どころ・聴きどころ**

9月、5年ぶりに来日するイタリアの名門、ボローニャ歌劇場。今回日本で披露される3演目、《清教徒》《エルナーニ》《カルメン》の聴きどころ、観どころを紹介致します。

特別企画② 89 **再考・ベートーヴェンの交響曲 ～その演奏スタイルをめぐって④**

4回連続の特別企画も今回が最終回。楽譜から作曲家の意図を徹底的にくみとる指揮者として定評のある下野竜也さんに、ベートーヴェンの魅力をうかがいました。最終回にしてますます筆致が冴える諸井誠、平野昭、安田和信各氏の論考も必読ものです。
(片桐卓也／平野 昭／諸井 誠／安田和信)

不定期連載 104 アンダンテ⑭ (岩下眞好)

別冊付録 コンサート・ガイド & チケット・インフォメーション
Concert Guide & Ticket Information

世界から「震災・ニッポン」へのお見舞いとエール⑦

ヨッヘン・コヴァルスキー
Jochen Kowalski

親愛なる日本の皆様へ

大震災から3カ月以上が経った現在も、いまだ多くの被災者の方々が日々の生活と闘っていらっしゃる状況に心を痛めています。本当は直接被災地へ出かけて行って、被災された方達の前で歌いたかった。それができれば一番よかったのですが、残念ながら今回は叶いませんでした。

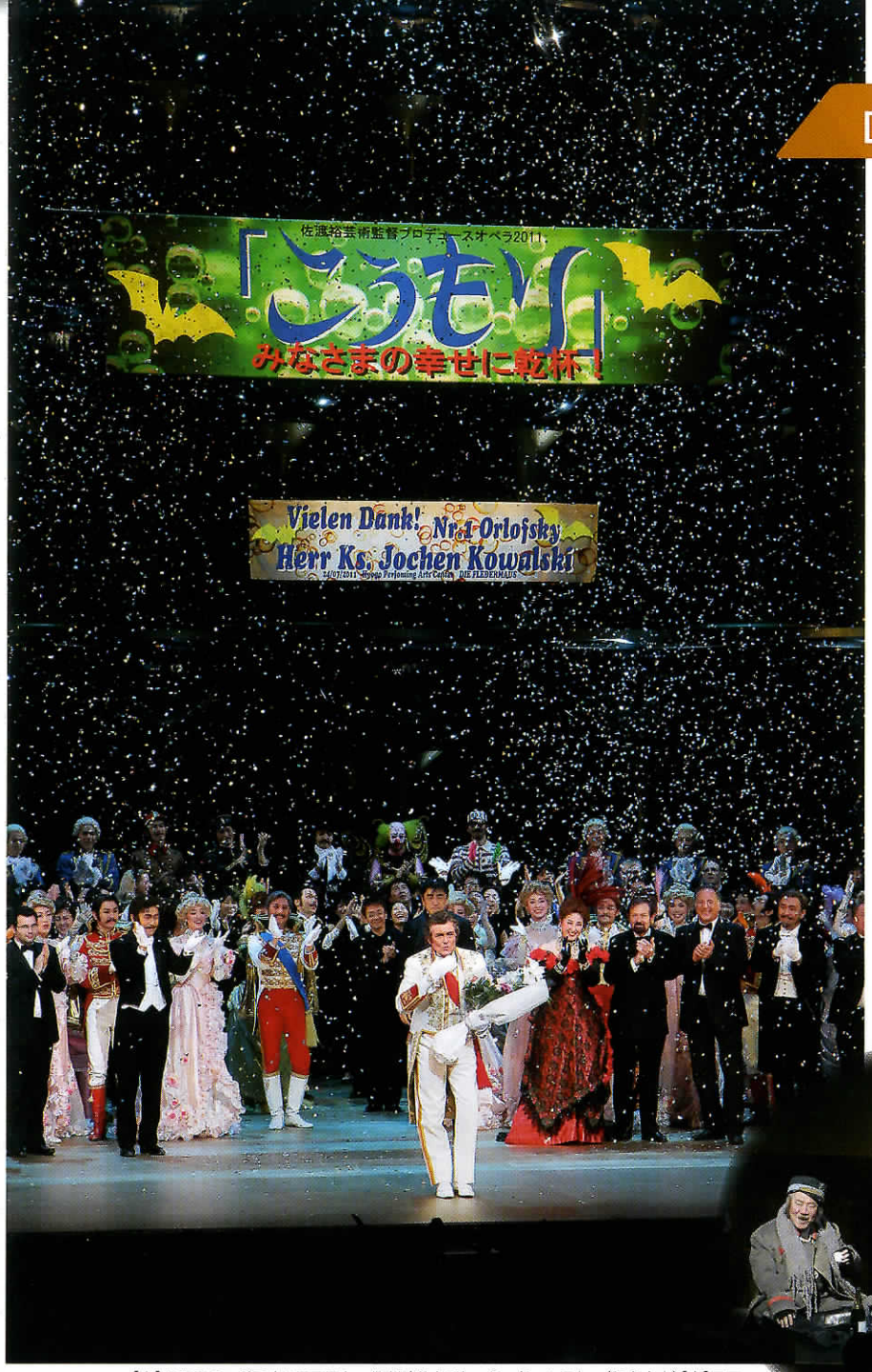
ベルリンの私の周囲では、この時期に日本を訪問することへのリスクを懸念する声もありました。ただ、私自身はお世話になった日本がこれほど大変な時だからこそ「絶対に行こう。行って歌うことが私の当然の務めだ」と思ったのです。これまで日本の聴衆の方々から頂戴した声援やご厚意に対する感謝を伝えたいという気持ちでいっぱいでした。今はとにかく、連帯感と共感とをもって「私の心は皆様と共にあります」ということを強く申し上げたいと思います。

カウンターテナー
ヨッヘン・コヴァルスキー

兵庫県立芸術文化センター・佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2011

喜歌劇《こうもり》

6月、ベルリン・フィル定期演奏会に客演した指揮者の佐渡裕が、自ら芸術監督を務める兵庫県立芸術文化センターで広渡勲演出の《こうもり》を指揮した。8日間に及ぶ公演はほぼ完売。話題を呼んだ広渡勲氏の演出に桂ざこば氏ほか、キャラクター豊かな出演者も話題となり、一昨年の《メリー・ウィドウ》以来の佐渡&広渡コンビによる兵庫発のオペレッタ第2弾は大成功を収めた。



【上】このステージでオルロフスキー役を引退するというコヴァルスキー（舞台中央）【右】フロッシュ役の桂ざこばとピットの中の佐渡裕 ©飯島 隆／提供:兵庫県立芸術文化センター

芸術・文化の殿堂をテーマパークに喩えたら、怒られてしまうだろうか？

2005年10月にオープンした西宮市の兵庫県立芸術文化センターは、今も神戸や大阪から詰めかける人で賑わっている。なかでも、2008年の《メリー・ウィドウ》は12日間のロングランを実現。オペラ・レヴュー・バレエが一体となり、上方落語の桂ざこばも加わって、最強のキラー・アトラクションを投入した印象だった。

同じスタッフが3年ぶりに集結したヨハン・シュトラウス2世の喜歌劇《こうもり》も、早々と全8公演を完売した（7月16～19、21～24日）。

舞台には高さ3メートルの巨大なシャンパングラスが3段に積み重なって、観客を圧倒する。オーケストラ・ピット手前に宝塚歌劇風のミニ・ステージ「銀橋（ぎんきょう）」があり、背景には、《チャルダーシュ》でハンガリーの美しい夕景、休憩後の景気づけに盛大な花火が映し出される。場面転換はバレエ付きのワルツや、ラインダンス付きのポルカ。目と耳を釘付けにするジェットコースター・オペラである。

歓声の絶えない客席から舞台裏へ回り込むと、客席を見つめるスタッフ・チームの眼差しは、冷静だが、どこか優しい。ベルリン・フィルを指揮したばかりの芸術監督・佐渡裕と、ミラノ・スカラ座やウィーン国立歌劇場の来日公演をプロデュースした業界50年のヴェテラン広渡勲は、オペラは初めてというお客さんのトキメキを何よりも大切にする。公演の合間を縫って、お二人にお話を伺った。

Interview

佐渡=広渡《こうもり》のオルロフスキー役は、ヨッヘン・コヴァルスキー。この舞台のためだけの来日である。終始にこやかに、彼にとって最後の、そして最高の《こうもり》の舞台について語ってくれた。

コヴァルスキー、最後の《こうもり》を語る

取材・文=吉村 溪 Text=Kei Yoshimura　写真=林 喜代種 Photo=Kiyotane Hayashi

兵庫芸術文化センターでの《こうもり》は、私がオルロフスキー役を演じた最後の機会になりました。とてもいい舞台だった。皆さん名残を惜しんで下さり、最終公演では途中から佐渡さんが涙ぐんでらっしゃるのに気づいたので、できるだけ彼の表情を見ないようにして心が動くのを必死で堪えました。泣くと喉がつまって歌えなくなってしまうので……彼は私が経験した中でも最も素晴らしい《こうもり》の指揮者のひとりだと思います。

ドイツには「最も美しい時こそ、身を引くべき時だ」という諺があります。ウィーン・フォルクスオーパーで初めてこの役を演じてから24年、その後もウィーンの国立歌劇場やベルリン、東京をはじめ世界中の多くの劇場で公演してきましたが、「最初」と「最後」を最高の舞台で締め括れたことが嬉しく、晴れやかな気分です。

本当のことを言うと、少し前にあまり納得できないプロダクションで歌わなければならなかったことがあり、もうこれでオルロフスキーは最後にしようかと思ったこともあったんですよ。でも、その後で広渡（勲）さんから色々なアイディアを満載した今回の話をいただき、佐渡さんも熱心に誘って下さったので、もう一度だけやってみようと考え直したのです。結果は大正解でした。私自身、とても楽しかった。「（今回台詞にあった）カケツケサンバイ！」とか、絶対忘れません（笑）。日本の歌手の方々とのチームワークも最初からぴったりで、看守フロッシュ役の桂ざこばさんからは「オモロイ」関西弁をたくさん習いました。子供の頃から憧れていたルートヴィヒ2世風の衣裳を着て登場できた上、かなり自由に演じさせてもらいました。でも、本当に――すべて終わってしまいました。光陰矢の如し、時間の流れというのは早いものですね。

《こうもり》舞台にもある「カケツケサンバイ！」のポーズをするコヴァルスキー。写真左は演出の広渡勲

もちろん、ソリストとしてのリサイタルは今後も活発に開いていきます。私が大好きなジャズの畑の音楽家5人と共演してバッハを歌ったり、役者の朗読と私の歌うロシア歌曲とで構成するシアターピースを上演したり、ベルリン州立歌劇場メンバーとの共演で「Café Europa」という〝カフェムジークで綴る欧州各都市の旅〟のような趣向の演奏会もあるんです（YouTubeにアップされている）。あとベルリンの出版社が、私に自伝を書くよう勧めてくれていますが、今のところはまだちょっと危険かなと（笑）。真実を語るのはなかなか難しいですからね。アイゼンシュタインがブリント博士（弁護士）のところに行かなきゃならないような事態になったら困りますし（爆笑）。（談）

オペラ 兵庫県立芸術文化センター《こうもり》

これはまた、メチャ楽しいオペレッタ。その功績の80パーセントは、演出の広渡勲にある。前回の《メリー・ウィドウ》より、さらに広渡流が徹底した。ショウ・ビジネスのヴェテランでもある広渡の演出プランには、スキ間がない。巨大なシャンパン・グラスが林立する背景が、あっという間に刑務所長室に早替わりしたり、宝塚歌劇などではよく使う「エプロン・ステージ」を多用して、客席の眼の前で芝居が進行、〝ノリ〟のいい関西の客筋を、みごとに取り込む。

佐渡裕指揮《こうもり》撮影：飯島隆／提供：兵庫県立芸術文化センター

ダブル・キャストのB組を見たが、いずれも芝居達者ぞろい。ロザリンデ（佐々木典子）、アイゼンシュタイン（小森輝彦）、アデーレ（小林沙羅）、アルフレード（小貫岩夫）など、歌唱も立派だった。台詞役のフロッシュ（桂ざこば）は、まさに上方喜劇を地でいっているようで、客席の笑いをとっていた。しかも、薄ッペラいドタバタにならず、喜歌劇の品位を保っているところがすばらしい。ウィーンの大ヴェテラン歌手コヴァルスキー（オルロフスキー公爵）が、衰えないカウンターテナーの声を聴かせたのも収穫だった。佐渡裕指揮の芸文センター管弦楽団に、元ウィーン・フィルのコンサートマスター、ヴェルナー・ヒンクが加わっていて、《ウィーン、わが夢の街》のソロを弾いたのも聴きものだった。全8回公演のうち6日目を所見。**7月22日・兵庫芸術文化センター　●日下部吉彦**

オーケストラ オーケストラ・アンサンブル金沢（第305回）

オペラと落語を組み合わる試みはすでにいろいろあるが、『ペラペラ「オペラ」笑劇場』は一歩踏み込む。第2弾となる今回は、管弦楽の出囃子で上方落語の笑福亭松喬が登場して、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》を、いわば新作落語として語り切る。舞台奥の仮説ステージの歌手たちは、噺に合わせて、文楽人形のように無言劇を演じ、アリアや重唱のみを肉声で歌う形だ。松喬は第1幕のややこしい出入りを咀嚼して、人物を巧みに語り分ける。第2幕で石像がそこにあると見立てた主従の会話など、話芸を堪能できる台本だ（脚本・演出・構成：響敬也）。騎士長（楠木稔）の石像の音楽を慣習のほぼ倍速に設定するなど、金聖響の解釈に妥協はない。このテンポだと、フルートの半音階が冷たい突風の効果を取り戻し、ドン・ジョヴァンニ（岩瀬昌弘）の死は、重い天罰というより、驚天動地の騒動になり、事態を収束する最後の重唱には、添え物でない意味が生じる。他も概して足早だが、管弦楽はノン・ヴィブラートでも残響を生かして響きは良い。ただし、自己完結気味で、歌と別物になる不満は残る。総勢7名のソリストは、女声を関西の中堅で固めて、男声に若手を起用。語りとの摺り合わせなど、制約が多いことを考えれば健闘か。**7月14日・石川県立音楽堂　●白石知雄**

金聖響／アンサンブル金沢

オーケストラ 関西フィルハーモニー管弦楽団（第231回）

飯守が常任を退き「桂冠名誉指揮者」の称号を得たのを機に、関西フィルとブルックナーの交響曲を番号順に全曲取り上げる新しいプロジェクトを始めた。前半に取り上げられたのは池辺晋一郎《悲しみの森》とブルッフ「ヴァイオリン協奏曲第1番」。今回は最初から関西フィルの、特に弦楽器群が非常に好調。繊細で目の詰んだ響きとデリカシー溢れる表情が、池辺の世界を的確に描き出す。続くブルッフも、分厚い響きに乗って堂々とした表現が繰り広げられる。松田理奈も飯守とオケの充実した音楽に支えられて伸び伸びと歌う。松田は技術的にしっかりしているだけでなく、音楽に情と熱があり、なかなか聴き応えがある。本格的で今後も要注目だ。しかしこの日の白眉は、何といってもブルックナー「交響曲第1番」。冒頭からテンポが実に良い。飯守の確信に満ちた覇気を失わない指揮振りに感嘆。ブルックナーが「第1番」と銘打った意気込みや作品の質感を、緻密な表現と堂々とした構築力、緊張感を失わないデュナーミクやテンポの絶妙なコントロールで見事に引き出した。オケも飯守によく応え、これほど感銘に満ちたブルックナーは久しぶりだ。今後のシリーズ展開が楽しみになってきた。**7月8日・ザ・シンフォニーホール　●中村孝義**

オーケストラ 京都市交響楽団（第548回）

生演奏でも、これほど精緻に美しく整えられた演奏が可能かと感嘆させられたのが、大野和士が指揮したマーラー「交響曲第3番」である。第1楽章冒頭のホルンから、気迫と確信に満ちた、しかし少しの力みもない音と表情が聴かれ、その後もオーケストラが一体となって精緻で透明感のある演奏が一貫した。それは明らかにいつもの京都市響とは違った音の質や響きとニュアンスの細やかさであった。特に驚嘆したのは、絶妙の音量バランスで、主要な旋律が際立っていながら、対位的な旋律やその他の声部も余すところなく聴き取れるところ。まるでそれは、スタジオ録音で編集の限りを尽くしたと言えるほどで、とりわけ第3楽章での舞台裏のポストホルンや、第5楽章での京都市少年合唱団および京響市民合唱団の音量は、得も言われぬほどの絶妙さ。そうした精緻さに貫かれている一方で、表現はあくまで自然で、何か特別な細工を感じさせるようなこともなく、まったく無理のない音楽が豊かに息づいていて、確かにマーラーの世界が繰り広げられたのである。第4、第5楽章でのアルト独唱は、当初予定されていた小山由美の体調不良で、手嶋眞佐子に変更されていたが、豊かな美声で情感豊かな歌唱を聴かせて、これも秀逸だった。**7月24日・京都コンサートホール　●福本 健**

オーケストラ 上田晴子p & 千々岩英一vn

パリ音楽院助教授の上田晴子とパリ管の副コンサートマスター千々岩英一による室内楽のタベ。前半は2人によるモーツァルト「ヴァイオリン・ソナタ第23番」とシューマン「ヴァイオリン・ソナタ第2番」。後半は、黒川侑、井上静香、小峰航一、金子鈴太郎が加わり、ショーソン「ピアノ、ヴァイオリン、弦楽四重奏のためのコンセール」。モーツァルトでは、千々岩がしっかりと楽器を鳴らし、時に激しく、時にじっくりと歌い込む。上田は、右手と左手の性格の違いを際立たせてヴァイオリンとの三重奏のように演奏したり、オーケストラのような広がりのある音楽を作り出したりしていた。シューマンは劇的な演奏だったが、2人の絡みや受け渡しが聴きものであった。千々岩のヴァイオリンは常に情熱を秘め、濃密にシューマンを描く。ショーソンでは、千々岩が艶のある音で際立ち、全体をリード。上田の多彩な音色も素晴らしい。そして金子が温かい音色で弦楽四重奏を支えた。**7月29日・浜離宮朝日ホール　●山田治生**

上田晴子（p）、千々岩英一（vn）©星合隆弘